

(1) プロジェクト全体計画（概要・目的・意義など）

乾燥地に生きる人々の生活を明らかにし、そこでの暮らしが生態系をより豊かにするようになるにはどのようにすべきかを考えるための実践的意義をもつデータベース作りを目指している。そこから生まれる新たなコミュニケーションが更に、データベースを豊かにするような、自律的に成長するシステムがその究極的目標である。

(2) 今年度の進捗状況

今年度は(1)中国山西省における三光作戦の村の老人の聞き取り調査、(2)アラシャン砂漠における生態系を回復させる経済活動を樹立するための研究調査、を中心として推進した。(1)は大野のり子氏が現地に数年にわたり滞在し、村の老人と心の交流を展開しつつ聞き取り調査を行なっているものである。我々は、その活動を側面支援してきた。昨年、その成果の一部を、大野のり子編『黄土地上来了日本人—中国山西省三光政策村的記憶—』を東洋学研究情報センター叢刊13として刊行した。保存性と頒布性の観点から、紙媒体によって刊行し、それを証言者やその家族に配布し、新たな聞き取り調査を行った。また、来年度に聞き取り調査の残りの部分を、叢刊として発行する準備を進めており、更にデータベースとして提供していくための作業を行っている。(2)は、富樫智「内蒙古阿拉善砂漠における住民参加型砂漠化防止の研究と実践」を紀要論文として既に発表しており、その成果を更に発展させる活動を展開している。具体的にはオニクという砂漠緑化作物の根に生育する植物を漢方薬原料として利用する事業のビジネス化を中心とした実践的調査を推進している。このなかから「生きた活動のための情報蓄積・生きた活動のための社会生態史学の研究・生きた活動の当事者による研究とデータ蓄積を支援する」という目的が実現されつつある。ここから、次世代型の「生きたデータベース」の構想のイメージが固まり始めた。

(3) 公開済の（または予定の）具体的な成果物

深尾葉子・安富歩編『黄土高原・緑を紡ぎだす人々—「緑聖」朱序弼をめぐる動きと語り（東洋文化研究所叢刊 第24輯）』（風響社）、2010年。

大野のり子編『黄土地上来了日本人—中国山西省 三光政策村的記憶—』東洋学研究情報センター叢刊13、2011年。

富樫智「内蒙古阿拉善砂漠における住民参加型砂漠化防止の研究と実践」東洋文化研究所紀要、第159冊、pp. 239(122)–286(75)2011年。